

国論と共存していたことに注目すべきである。西洋列強の侵略を背景として、この亡国意識は当時の多くの思想家たちが共有していたものであり、彼らは中国が「瓜分」されてしまうと恐れられていた。亡国の危機と政治情勢は当時の思想界の根本を形づけた。清末において、仏教の墮落もこの亡国という大きな枠組みのなかで位置づけられていた。

末法という仏教に対する危機と亡国という国に対する危機が並行して考えられていたため、仏教の改革や復興の思想も中国全体の改革や復興と関連させられた。当時の思想界では改革や革命という政治目的のための仏教思想が唱えられ、仏教が中国の復興と近代国民国家の形成というナショナルイズムの物語のなかに統合されていたことを示している。仏教者自身の末法思想と仏教墮落論も、国が衰退・墮落する主体としてそのなかに密かに想定されていた。世俗的な知識人たちのみならず、仏教者自身においても仏教復興を救国策の一部としてなすとげるという考えが見られる。

清末において、従来の仏教そのものを主体とした末法思想は亡国危機の背景の下、当時形成されつつあった近代国民国家概念と結合したのである。そのなかで、中国の救国が最終目標となり、中国という国家がこの墮落言説の真の主体として現れた。清末にさかんに唱えられた末法思想や仏教墮落を理解するためには仏教内部の状況のみならず、当時の政治情勢全体を視野に入れる必要がある。そうすると、当時末法思想がさかんに唱えられた要因の一つとして、亡国危機論を指摘することが可能となり、国民国家とその復興をその主体とする末法思想を

通じて、仏教を当時形成されつつあった近代国家という枠組みのなかに位置付けることも可能となる。

井筒俊彦におけるの禅思想とその理解

ファン・ホセ・ロベス・パソス

井筒の禅思想を深く理解するためには、彼が父親から受けた影響に言及しなければならない。彼は幼少の頃から、父親に公案集の読書や「心」という文字の書写とともに坐禅をさせられたりする中で、禅の修行や教えを学んだ。父親の教育が厳しかったためか、井筒は父親に反発し、次第に東洋思想から距離を置くようになり、西洋の哲学や言語に関心を抱くようになった。それでも幼少時に体験した禅の修行が、その後の彼の宗教哲学研究に大きな影響を与えていた。具体的には、西洋哲学の中でも禅思想に最も近いと思われる神秘主義やイスラーム存在一性論に注目した。言語への学的関心も彼自身の禅理解と密接に関わっていると言えるであろう。

彼は鈴木大拙に続いて、一九六七年にスイスで開催されたエラノス会議に、東洋思想の中でも特に禅思想について講演するために招かれた。イスラーム思想を中心として研究を行っていた井筒は、エラノス会議の主催者の要請もあり一九八二年まで一二回、禅思想を中心として東洋思想について講演を行った。それらの講演の中で、講演テーマとして禅思想を取り上げたものが五つあるが、そのほか、インド思想や中国思想に関する講演の中でも、しばしば禅思想を論じている。エラノス講演が契機となって、井筒は改めて学的関心事として東洋思想の構造を

探究するようになった。一九七九年、イランから帰国後、「東洋哲学」という壮大な構想のもとで『意識と本質』などを纏めたのである。

井筒によれば、東洋の思想伝統においては、西洋哲学とは違って、伝統や文化さらに思想も多様であるために、東洋全般に共通する構造を見つけるのは至難の業である。そこで彼は言語学の意味論的アプローチも利用しながら、東洋思想の古典に関する「創造的な読み」を展開した。井筒が構想した「東洋哲学」は多層的多極的な構造をもっており、意味論的に「意味分節・即・存在分節」を特徴とする。禅思想も東洋における典型的な思惟パターンの一つであるという。

井筒の「東洋哲学」には、二つの重要なプロセスがみられる。まず、一つは表層意識から深層意識への深化プロセスである。それは日常の表層次元における多様な現象を本質の深層次元でとらえるとき、全ての区別が融消する。禅思想で言えば、全ての「もの」の本質は「空(無)」(*śūnyatā*)である。次に二つ目は深層意識レベルから表層意識レベルへと立ち戻るプロセスである。井筒はそのことを道元の言葉で言えば、「身心脱落」と同時に「脱落身心」の生起としてとらえる。悟り、見性体験を中心とする禅者の修行道程において、「もの」の本質を知った後、世界を複眼視することができる。この点について井筒は、禅者ばかりでなく東洋の哲人に共通してみられると言ふ。日常の世界では、言葉の意味分節作用によって物事が違ってみえる。ところが経験的世界のあらゆる存在者が本来、無「本質」であると思ひ定めることが禅者の「向上道」への第一

歩である。「向上道」は「未悟」の状態、「向下道」は「已悟」の状態である。また禅の悟りの境地は、すべての「分節」の根源である「無分節の境」すなわち「意識・存在のゼロ・ポイント」であるという。

無「本質」を悟るためには、「言葉脱落」を行わなければならないが、井筒は禅の「公案」や「問答」は意識の深化への働きをもつという。この絶対的意味無分節の世界は「もの」の本質そのものである。このように井筒は、自分自身にとって最も親しみのあった禅思想の思惟パターンを最も重要な契機として、彼の「東洋哲学」という思想の構築をめざしたと言えるであろう。